昭和二七年一二月一日 第三種郵便物認可

經濟論叢

第104巻　第3号

哀　辞

故鎌倉　昇教授遺影および原稿

経営戦略について……田　杉　競　1

ニュースと「企業性」の接点……島　崎　憲　一　23

フィスカル・ポリシーと完全雇用……森　岡　孝　二　41

記　事

鎌倉教授逝く

追悼講演（石川常雄・市村真一・堀江保蔵）

追憶談（杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋）

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京都大學經濟學會

鎌倉昇先生を偲んで

西　村　　理

雨雲の重くたれこめる夕方，先生ご急逝の突然の報を知らされたときには，私は驚きと狼狽との交錯した気持ちで茫然と立ちすくんでしまいました。思えば今年の2月，大学卒業も間近かに控えた頃，私は先生に「大変お世話になりました」とお礼を述べたところ，「何をいっているんですか？　君とはこれからまだまだ長いつき合いですよ」と笑みをたたえながらおっしゃって下さったのに，こんなにも早い永訣(わかれ)が襲ってこようとは思いもよりませんでした。

私にとってはわずか3年余りの短い期間でしたが，その間，先生の教えを受けたことは何ものにもかえがたい貴重な月日でした。今までのいろいろな印象の中で，特に私が感銘を受けたこと，それと同時に今後いつまでも肝に銘じておかねばならないことは先生が経済学に対してもたれた御研究態度でした。先生は常に現実の経済現象に目を向けられ，その動きを把握されながら豊富な資料に裏付けられて，抽象的な理論の世界と具体的な現実の世界との融合を試みようとしておられました。従って講義をされるときも我々の理解の反応をうかがわれながら，我々の身近な例を引き出され，容易平明に，しかし内容的には高度なものを理路整然と語られ，その上，先生独特の話術の巧みさについついひきこまれて成程と感服するばかりでした。我々の質問に対してもそのいわんとする点を即座にのみこまれて的確に答えられると今更ながら先生の頭脳の明晰さに舌を

巻いて驚いたものです。

ゼミナールにおいても先生は常日頃から「来るものは拒まず，去るものは追わず」という考えで，決して我々学生を拘束されることなく，各自の自主的判断にまかせられました。だからといって決して我々を放任しておかれたのではなく，我々学生には目に見えない所でいろいろと気を使われ，相談ごとにも親身になってアドバイスを下さいました。

ある時，先生は次の様なことを言われました。「私は常に minority の道を歩んできました」と。それは先生が多数意見に盲目的に迎合されず，深い学識をもとにして自分の思想・信念を貫き通された態度を表しておりましょう。いわば先生は孤高の人であられ，本当の意味での自由人であられたように思います。また先生はこの日本という国に限りなく深い愛着を感じておられたが故に，現実の日本に対して多くのきびしい批判を浴びせられましたが，実はそれらを通して何か一つの大きな理想を追求しておられたのではなかったかと想像されます。それが，はしなくも業なかばにして逝かれたことは，先生にとってこの上なく御心残りなことだったでしょう。

先生は昨年の10月から学生部委員として日夜多忙をきわめられ，幾度となく徹夜でその任務にあたられていた御苦労は並大抵なことではなかったと思います。ついこの間も「学生部委員で大変ですね」とおいたわりしましたところ「いや，それ程のことはありませんよ」といって笑っておられましたが，大学構内で乱闘騒ぎが起きたときも事務室から真先きに飛び出されて忙がしく構内を立ち廻られているお姿をみでいるとつい「どうか先生，お身体を大切にして下さい」といわざるを得ないほどでした。

先生が研究者としての職務を果されたことはもちろんのこと，教育者としても立派に職務を果されました。先生が御急逝されて早くも10日余り経ちましたが，その間，研究室の整理が進むにつれて先生のもっておられた広汎な知識・非凡なる才能・スケールの大きさに今更ながら驚嘆しますとともに，先生の御急逝が今の日本にとって測り知れない大きな損失であることが身にしみて感じられ，暗然とせずにはおられません。先生の御生涯は太く短いものではありましたが，内容的には本当に充実した人生を送られたのではなかったでしょうか。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

昭和44年7月18日